

竹

藏

林

春
筴

難波津や大江の岸近ふその家代と
 氣代く礎とくくくくくくくくくく
 ゆう園といふ家流とあり東林
 雪中堂と云はれり一歳とあり
 くと何れも雪正風乃まきまきと
 けくく風流も富るこのこく
 業遠つ國の雁章を傳えて事と
 事とを家代君が代の抄ゆふ
 たりけくくくくくくくくくく
 くとくくくくくくくくくく
 風流の人も亦おほしあまに
 ちまふ抄くくくくくくくくく
 くの抄くくくくくくくくく
 乃母とくくくくくくくくく

難波津や大江の岸近ふ、その家代と
 礎をかたうして、名もふる國といへ
 る誹士あり。東都雪中菴三世のある
 じ蓼太より、はせを嵐雪、正風の遺書
 をつたへて、風流にも富るをのこ也
 其の業遠つ國の雁章を傳えて、事と
 はるも君が代の靜なるためしなる
 べし。よておのづから其名四方にひ
 ろがり、訪ふ風騷の人も亦おほし。こ
 れにちぎる折からの句有。無下にか
 ひ捨むも本意なすと、ひとつの冊子
 をしたくぬ、此みちのよしとなく、あ

行く行く書きしめし
 となりまはしはるるあら
 ましを序とせよと乞ふも
 とよりみじかき蘆のふしの間の才
 をもてかゝる初めの筆とらんやと
 いなむべき事ながら、蓼師の需に應
 ず。將四とせの先にや。かの地に冬ご
 もりせし契もあれば、咲にほふ言の
 葉は、すみよしの濱の眞砂とつきせ
 ず。岸の姫松のあらんかぎりはと、ね
 がふことをしかいふ。
 安永二年初冬 天 府

安永二年初冬

葆光齋

天 府

俳諧懺悔文

情、我この道にあそびしこしかたをおもふに、廿とせあまりのむかし、東武の活々坊
舊室の門に入て、芥室の號をゑたれど、たゞ歳旦せいぼの二句をなすのみなりし。と
し經て浪花の半時庵勃々庵の社中になりて、舊國あるひは舊州とあらため、流行の點
取に勝負をあらそふを是として、蕉門の風雅はちからなき物とのみ心にとゞめず。松
露吸露又は雪中の庵主たちへも面をあはせながら、そのみちのおくをたづねさぐる事
もなく、さながら天上天下唯我獨尊の思ひに、我も浪花に一人の作者也と、鼻のあた
りうごめきて、翅も生なむこゝちなりしが、四とせ已前のはる、家の業によりてみち
のおくに下りしが、かの松がうらしま一見せばやと、千賀の塩釜の浦より、ひと葉の
舟にさほさしてうかれ出たり。こゝや名にしおふ扶桑に三つの勝地なれば、あだに見
過ぎむも本意なしと、かねてのあらましにて、袴羽織の禮服おこがましう甞うち敷、
筆硯の調度もきよらを盡して、ことごとくしく置ならべ、舟人に物がたらせて漕出ぬ。

頃は彌生も半過ぬる頃なれば、行／＼さくらは梢にほころび、すみれたんほゝは堤に
咲みだれ、木の間のうぐひすも入江の蛙も、おもふ所みる處風韻あらずといふ事な
し。江の中三里浙江の潮をたふと、はせを翁の詞も思ひいでられ、あたかも仙境に
入かとはかり、やをら筆をとりて案にしづむに、風景にけおされて一句も出ず。とか
くして舟は雄島の岸につきぬ。それより瑞巖寺五大堂など名だゝる處を見盡して、寺
前の何がしが許にやどり、この樓に昇りて見わたせば、松どものいくとせへたりとも
しらぬ色なるが、潮にかけをひたして誠に笑ふがどし。高欄に倚て視引よせ、おもむ
きをさがすに、日既に西に没し、斜影紅をなして海上又ひとつの景色を添り。江の間
／＼小舟を漕つれ、魚をわかつ聲／＼またあはれなり。ほどなく晚鐘告わたり、もの
のあいりもみえず。いざ夕ぐれの松しまをと筆をとりたれど、草のうへの露もうかま
ず。夜も早更行むとおもふにも、又あひがたきこの夜なるにとうちも眠らで、高欄に
ふとんうちかけ、悠然としてもたれぬたり。折ふし廿日餘りの月のさし出たるに、磯

うつ浪の月に映じて白妙に、島／＼の松のいろもおぼつかなきさましたる、墨繪のまつしまともいふべし。これをもとかくにおもひぬれど、一句のおもむきを得ず。春の夜のならひとて、ゆめばかりに明わたるよとおぼへて、東の方しらみてわたり、鳥の聲枝に聞え、朝がすみうちそびき、海的面靄々としてきのふにかはる風景なり。かくて日のひかり竿ばかりにさしのぼり、霞の衣のほころびたるに、鳥こそひとつみえたれ。あはやとおもふうちに、こゝかしこあらはれ渡る千島の松のみどり、きら／＼しく、名工の彫めるごとく、妙手の繪がける如し。心詞も及およれず。この時興に乗じて心頭にうかぶ物あり。うつゝならず筆をとれば、

朝霧やあとより戀の千松しまと書終りて、よく／＼おもふに、是は雪中庵前とし行脚せられ、此島にあそびし句也。東都にてものがたり有し頃は、たれもいふべき事ならむと、大概に聞なし置たるが、このときの實境に催されて、心にうかびたるなり。暫しばひとり推敲をなすに、朝霧のたちおほひたるが常ならずと賞して、五文字を

置、跡より戀の、と艶詞を加へたるおもしろさ。意味深長なる事、古人のほね折し處
みなかくこそあらめ。我も人も同じ事いふとのみおぼえぬたるが耻かしさ。はじめ
我及ざるを知らるも、此松島一見の徳により、かゝる絶妙の境をさぐり得たるも、外な
らぬ因縁にやと、このとき胸裏に雪中を師と尊びて、我をしりたるは、あつばれの大
悟ならむと自得し、江戸にかへりて雪中菴主にこの事をさんげす。師しめして曰。よ
しく、夫こそ我家のりくつをはなれたる、一路向上の風流なるをや。世塵得失を忘れ
て、月下推敲の句を點頭すべしとぞ。それよりこのかた花にうかれ月にあくがれ、雪
に寒き日も、蕉門の意をさぐるに仰げば彌高し。去ども老若貴賤のわいだめなく、老
後のたのしみといふ教なれば、こゝろを遊しむるにたれり。猶行すえの修行むなしか
らずば、下手の數にも入なむ。そは生涯の本懐、このみちの冥加ならむかし。

明和七年庚寅冬十月十二日

浪華荒陵山下於蕉翁牌前 回心齋 舊國 謹誌

元日やこの時人壽二万歳
元日やうぐひすもなかでしづか也
老のはるめがねに蒔繪かゝせばや
元日のおそび所をさがせば
新町の元日やこれ姫のくに

うまれしむかしの曆にかへれ
ど、南州のことぶき猶たのみ
有。

百まででは三十九年はなのはる

樂共樂利其利

唯起てかん祝けりわれが春
霞けりはやかみの町しもの丁
とし喰ふおにの行衛やはつ霞
いつはともあれはつ烏く
まさ夢や浪花は梅のははのはる
武州鬼石福田氏八十賀

ひとの心をたねとして、万の
ことのはとぞなれりけるとは、

我生舞のみにちにも尊し。

なにはづのはるや二日は浅か山
門松は王母に戀の染木哉
見あるかむいざ門くくの松の月
かど松やかゞ見のおやに物申

有感

つながるゝ三尺の世やさるまはし
さる引の友にあひたりうつ山

住吉奉納良能勸進

しら鶯のかすみこぼすや松の陰
なゝ草やおやの拍子にかしこまり
七草に不二の山彦うとふ也

楓橋夜泊齋

とだへては船に閉ゆるなづな哉
雨がちに雪ふる朝やわかたつみ
さむき方に立て若菜の御供哉
袂ふく若ながすへや小まつ川
鬻かへて腹立させむ妙しろ女
一キ角つねに申されしは、

好、氣根、藝古の三つにくらぶれば
すきこそものゝ上手なりけれ

將菜の師、大はし宗桂も、つねくこの
歌を誦し申されし。

ほろゝうちてちらすな花のきじかくし

すみだ川にて

樽際浪をうつて妹がるはたぞおほる夜に

古齋に

かゆ杖や馬の内侍をしとゝうつ

二股大根の齋

此大根人にはみせぞはつ子の日

屈原齋

むめひとり咲ぬこと木はまだ寒し

時人に詔らはすむめさきにけり

武州兒玉都春貞寺といへるに

むめあり。花五色にしてめぐ

らし。

花さらば又いつ色のむめの庭
香を狩てむめのはやしに入夜哉
ちるむめや顔のかつきし魚のうへ

ひらの町神明境内、出世天神

は松木家より奉納ありし神鉢

也。

さくや此花みまつの木の間より
たえず匂ふ梅又もとの香にあらす
梅咲て木をとこがちの花見哉

後朝

我袖のわが袖ならずむめの花
一支考曰。俳諧はたゞ梅の花のやうには
べし。此はなのかたちは世にへつらは
す。たゞ有のまゝに咲いで、殊勝の
ものなり。しかるにあやなきやみの夜
すがらにも、たゞひとりにほひゐたる
雪の裏は更なり。花の佳名を世にもと
めぬは、俳かいの人のためにして、名
をいそぐまじきたとへにてあるべく
い。さればとて捨てて、世をするすみ
なるもにくき物なるが、深き時は暗香
の月にうかび、あさきときは疎影の水
に横たふ。風流ならざれば俗におちや

すし。さびしからざれば酒色にまどふ。

あるひは寒く、あるひはあたゝかに、

世に殊に自在のものにて、これらを法

師がよのつねの工夫にいたすにてい

へ。

鈍さげて出たりな梅の亭主ぶり

おもひ切て梅見に出む日こそなき

几童が夜半亭になりし賀

一條院の御時、花有暮色と

いふ心を人々につからまつ

りに、刑部卿範兼、君が

世にあへるはたれもうれし

きに花は色にも出にけるか

なと詠玉ひしも、かゝる

折からの毒におもひあはせ

て

はるの夜も半になりぬむめがやど

散しほや香もそゞろげに梅花

主家のつとめ功なりて、國に

かへり申さる、信濃、人に

おとらめや陶朱買臣むめの笠

むめひと日くかゆる餘寒かな
下もえや忘れて過しかきつばた

木曾深坂といへる所に

下もえてあつもの富る山家かな

春庭曲

むめ柳出あひも上手同士なり

一洛の諸九、松しま行脚の折の添へちか

らにとて、案内のために遣しける元二

郎といへる、あらおやちの七十五才に

なりたるが、風景のおもしろさにめで

てや有けむ。

いのちこそたからの山の松しまや

かく不風流のものだにも、時に感じて

自然とうかびしものなり。又みちのく

にの二本松に、俳諧すけるもの共、さ

くらがもとに酒くみかはしあそびぬけ

る中へ、所の百姓のいで、酒のませ玉

へと乞ふ。ほ匂いたし申されなば、い

かにもとたはれしに、この人しばし案

じて

きのふより翌よりけふのさくら哉
いひ出されて興さめ、人々ほ何も出さ
りけり。

うつかりと名所の中に田うち哉
母やまたむ我うつ蟲のおほき事
川島もはたけうつ也淀かつら
いて解や木わたの里のかり足駄
齒ごゝろの又冴返るなます哉
雪消て遠山松となりにけり

和州檜原玄賓庵主勳進

七十賀 松延齡女といふ事を

松につれてあるじにつれて松の花

伊豫の國朝くらの庄官かたに、

今治の太守の名を玉ひし青三

位といへる松に

蔭深ししぬもひろはで松の花

覺英僧都舊跡みちのくくづの

松ばら 六百五十年忌

松にこそ慕のむかしを呼子どり

上毛にて

鞆立や左のゝ酒やのひたしもの
ひとつ呑てうす紅梅や藤つららうり
おとろへやむらさき匂ふ藤のとう
一おにつら曰。未熟の人の俳諧は、春雨
のと五文字をいひ出し時、はるさめ先

に出ゆといへば、秋さめのとつけかへ
待らんといふこそうたてけれ。春の月
はくれ初るゝおぼろだちて物たらぬけ
しき。夏の月は灯をとをく置てながめ
深し。秋の月はまどに、軒に、海に
川に、野に、山にながめ有。冬の月は
ひとむらの雲の雨こぼし行、ひまをて
らしていそがし。

はるの雨は物こもりてさびし。夕だち
は氣はれて涼し。秋のあめはあはれに
てさびし。冬のあめはそこよりさびし。
うぐひすはきく、郭公は待侘るこそ詮
なるべけれ。四季折くの草木ひとつ

辨ふべし。

はるさめや舎がてらの年八卦
地にあらば連木すり鉢猫の戀
あかつきや猫の戀するはつせ山
戀くゝて猫のおなかやはるの月
(原註腹中)

おもひかねて猫はなちやる雨夜哉

はりまや九兵衛三廻

北はまの獨球ともいはれし人

なれば

今は三とせぼさつの中のねはん哉
しらうをに有明月のうるみ哉
白魚やこの傳奏はなにの君

父をうしなへる人に

霞日やのこせしめがね見れば猶
かすませも果す江戸ばし日本ばし
三條や霞ひとへに人ひとり
帆ばしらに霞の袋脱したり

内田活丈子、上がったへのぼり

申さるゝに、我は先だちての

ぼりし折

すみよしに松とて笑ふ山かつら
きさらぎや手もとおぼゆる莖の水
おぼろ夜を見つけ出したりすみだ川

述懐

おぼろ夜や我もむかしのをとこぶり
朧夜や越路にかへる鏡磨

凡十子の國にかへり玉ふをお
くるに、なにか別れのかなし
かるらんとは、大江の白女が
いのちをかこちしことのはな
がら、左にあらて

かならずよ似た春の來てかたるべし
いとゆふや南に向ふ東大寺
かげろふやたちも及ばぬ不二の裾
あしたにはかげろふ立ぬ鳥邊山

花頂山にて

かげろふや僧の答ふる小かちが井
湯炎や荷鞍ほしたるはし驛
たがために酔みそ待らむはるの卿

長閑さや實にはちかるゝ海音の音

信州上諏訪自得所持、はせを
翁より傳來の、うぐひすの水
滴に、人ミの句を乞はれる
に

おし親のうつはや道の月日ほし
うぐひすの旭むかへてはつ音哉
うぐひすの巡るや軒のいも依
金色(衣カ)鳥や鈍つかはぬ家のさま
鶯の初音やちさくうちかへし
きぬくゝにうぐひ啼てうとまれす
まだ寒し晶うつりしてなくひばり
我はたに雲雀舞はせて日は入ぬ

樂人町にて

破を舞ふて急に落るかあげ雲雀
落しほの月をおくるや蜆とり
すみよしや粉濱の蜆赤みそに
生のりや江戸の南の小むらさき
西の京 西大寺など見巡りて、
遍照がうたをおもふ。

柳にも誠少しつゆの玉

きのみ今日あすの柳のみどりみむ
章臺
見盡してかゞみにうつす柳哉

老情

春やむかし出口の柳みてかへる
青柳やおもへば長きつゆのみち
なかゝに柳のあるじはる易し
大筒の玉にもぬける柳かな
女あふぎをひるひし人に
落にきや女のこしのやなぎより

江戸兩國道邊

漁舟みえて吹なりはるの風
しのぶ夜のしら玉椿散にけり
鶴舞ふて椿扇くゝちる日かな

夜半亭燕村を悼

この叟の潔き性質を思ひて
老少不定の心を
落るときおちし椿の一期哉
落つばきうつろふ花は枝にあり

靈山丸山あるは花頂の風塵水
音、みな此會式の興を添ふる
なるべし

糸竹の花の雲間や墨直し
うどの香や詞少のをとこ文字

遠州高遠の志むら氏、筆道の
ほまれ有しが、二月廿五日故
人の數に入申されしを聞て

西行のもちより二十五日哉
夕がすみどれが女のふまぬ山
やぶ入りの二日になりし夕日哉

對客

我はせきあえずも山葵たゝきしを
活々坊の云。一座の宗匠は軍中の大將
軍、商家の番頭などの心もちにして、
一座作にほこるときはしづめ、一席し
づかならば、又引たてゝ句をなすべし。
ひとゝせ初午奉納の畫馬、連衆作に作
をあらそひし跡へ、樓川が
初午やゆらりゝと人通り

かくいひいでしかば、かくべつきらび
やかに出来ばえせし。是死活のあしら
ひ也。此一句ばかり聞たる人のなに事
もなき句なりなど評したらむ。物その
場の差路あり。これを思へば發句ばか
り云つたへて、いにしへ人の句を評せ
むは、おぼつかなき事ならむかし。

はつ午や有ともしらぬ古社
はつ午や戸に拍子とるめぐら兒
はつむまや新別當の青あたま

二月堂

水取や井をうち廻る僧の息
苗代につくばのこのもうつる也
なはしろやきのふは艸の水がくれ
苗代や小蛇のわたる夕日かけ
君が代や米喰ふとてわらびうり
たんぼゝや野をめぐり來る水の隈
なのはなやおにの諷ひし門の跡

尾崎氏江戸下りに

四方は花あべ川もちに江戸女郎
三尺の松みどり也やけのはら
眠さめてひとゝき春の夕日かな
はるの日の風巾ものぼらずたくれぬ
鯛かふて海女と酒くむはる日哉
ぬれ鶴やす黒の薄分て行

畫圖

紅梅に兒の唐輪のそこねけり
一蓮二曰。誹諧はたゞ物の本情にまかせ
て、時のよろしきに遊ぶなり。古式に
つながれ、其粕をねぶるまじき也。た
とへば八卦には、離坤兌乾坎艮震巽と
あるを、易には乾兌離震巽坎艮坤とい
へば、おなじ文字にてはしる也。走て
よきもあしきも、其時にのぞみての事
なるべし。古人の格式は初心の人のた
め、中品已上の俳諧は、われしりて我
するなれば、一字一點の學文も入るべ
からず。學文は階子也。はやくのぼり

ていらぬとはしるべし。下品のうちは
しり過て、階子ふみはづしたらんもあ
やうし。

紅梅に日本ばれの天氣哉
紅梅はさめて彼岸の夕日哉
菖の輪の下に鉦うつひがんかな

伊勢山田ある寺に、秋葉山勸
請のやしろ有り。かたえなる
ひと木に

三尺の接ほも梅の匂ひ哉
ひがし白にし紅梅につきほかな
物さはる夢のみ見する接ほ哉

關口七郎左衛門風士が七十賀
猶花にちぎらむ那知の若衆ぶり

亡妻三周の追悼
わかれにし其日ばかりはめ
ぐりきて といせの大輔が
ふる事も

にた花の物はぬ日ぞ恨なる

上毛清水寺奉納

花さくや御座まへの届くまで

雪中庵七十の賀
老師が古稀の祝に、我も二
つちがひの老弟といはむも
をかし。

たえずみむかたみに花のかとみ山

攝州藩松矢島氏へ八十賀

山口や花の千もとの八十せ川
かはらけに味噌も置れぬつばめ哉
つばくらや其子もかゝる思ひせむ
家分てつばくら待む棚つらむ

河州岸田堂

かけしるや其梁のつばくらめ

一古き歌を折よく誦しいでたらむは、あ
らたによめるよりも風情ありとや。淀
のわたりのほととぎす、宗盛の宇佐の
奉納など、手がら有てきこゆと承る。
ちか頃をはりの人のつまの七とせま
で、腰たゝで有しが、つひに身まかり
しとき、其丈のおもひいでし申。

菱喰し雁とおもへどわかれかな
野水が匂をつぶやきは、いとあはれに
して、野水が作せるよりも情あつかりけ
ると、鳴海の蝶羅ものがたり也。

行雁や北斗の外は雲の浪
つまなしや一羽たち行雨の雁
かへる雁紀の路や花のほころびし
衣襟えりばかへり來よ雁かへり來よ
雁風呂にうちくべられし染木哉
大旦那となりけり春の雨やどり
鳥の巢や小僧にしめす事ひとつ

莊子の藪

其鼻に入れて眼覺せ蝶のゆめ
蝶くもしろきに事はたりぬべし
半して羽拍く雨の胡てふ哉
たちいで、初蝶見たり朱雀門
世を世とも三月がほのこてふかな
壺立に壺飛ぶ蝶のすがりけり
蝶の鬚立ふるまひにかくしけり

なる神の撃ぞや胡てふ舞出よ
みよし野の吉野のおくや蜂の聲
にしきどにはちのす有と申けり

山里

雪解や今更木々の下紅葉
雪どけや谷の戸いづる檜もの
片隅に鉄のひかりやはるの雨

高雄山にて

はつ戀や袈裟も紅葉も青きより
鳥辭曰。ばせを翁古池の吟、世上にい
ろくくと解をなす。恐らく翁の心にあ
らじ。其比尾城の四五子や、正風にも
とづける折なれば、ひとしほ易きかた
に骨髓を盡し、衆にしめすの五文字な
らむ。キ角が山吹やと申せしは、おも
しろけれど、衆口もとの旦風にかへら
ん事をなげき、山映の花なる女にはよ
からむ。我はかくこそと御申ありし。
向上の事はさもあれ、みちに志のあつ

き事をおもふべしと。

游女が御簾をかゞげし蕭に

猶みたし花の夕邊の月のかほ
ねむき日や水をはなれてなく蛙
思ひ出や蛙一匹御溝水
ふり出して眠しづまるかはづ哉

ある諸侯の御やかたにて

ほり池や御領のかはづゐてまいる
信玄の團扇ゆらくかはづかな
千町田に聲あはせけり井の蛙
雨のかはづあるはつま戀夜もあらむ

有感

青からば憂には泣かじあか蛙
ほしかげに田にし鳴也豊浦寺
龍にかしてあとにとさるゝ田にし哉
革足袋のもえいづる春にあひにけり
其中のひとつは落よいかのぼり
いかのぼりどちらへ落む安藤黒田
物洗ふ側へ落けりいかのぼり

庄田腸音を悼

いとされて風巾のゆくへや西の空
越後のくに、有といふなる

むら消へし雪のまに／＼簾かけ
出かはりの人ひと月はおにもなし
でかはりの井戸には淺きさぎり哉

南京行

子をおもふ闇はあやなしたゝき鹿
鹿の角おぼつかなくも拾ひけり

上巳

ひなの膳揚名の金太郎あらしけり
白桃の苔にひなのかほかゝむ
おもかけのかは子を出ぬ古ひいな

飛彈の山中に

六十の息子もちけりもゝの花
桃分て來たぞや伽羅の油うり
咲初て桃なきさとはなかりけり
桃さくや跡目披講の片山家
狐去て桃林しばし春を笑

東方湖、山岡頭巾をかぶりて、
梳をぬすむ書に

此も、や年の眞砂は盡るとも

叔父前田良阿君悼ふ

はろの夜のかたはれ月も入にけり
はるのよやふしみあたりの片はたご

墨江に落日を見る

人去て三日の夕浪しづか也
蟹とりて甲に物かくしほひ哉

和歌の浦にて

鴻は干て便なきかにはさみ哉
ながき日やけさ追やりし黒き蝶

永日やまだ中山の八から鉦
寺もちし初や花のてい主ぶり

くくられぬ豆腐も來たり花の頃

世は花になるともしらすおく吉野
ありませよひと夜は花にいなびかり

花を分てはなさきにけりよしの山
江戸酒にいたみの衆のはなみかな
花に下戸あはぬ敵とは無念也

花に世をとりて七日の上戸哉

白麻五千句に

さくやこの五度はなのよしの山

あらし山の花みむと、たれか

れ訪ひ、野の宮天龍寺など見

めぐりに、臨川寺のあたり

より、雨しきりにふりしかば

花とちるは雲也雨のあらし山
落貝の提重遅きはなみかな

仁和寺にて

花を踏て蛇のうへ行人の聲
はなの山伽羅ぬす人をみつけたり

歸坂

草の花見ゆめにもあらずぶとの跡

花みぬ人唯ちるまでの名也けり

ちりくゝて花の氣遣しづまりぬ

老はたぞ涙おとして花にたつ

一船留て陸はさくらの花車 西鶴

此第三の事 後水尾院様御たづね

被下ゆに、宗因が申つるが、留てゆへ

ば、とまりも可仕と御答申上し、其と
し柄人がらにもよるべし。

初ざくら田舎の人が見て仕廻ひ

油断して二番ざくらのはなみ哉

手をうたばちりもやすらむ初櫻

うぐひすのしるき眼やはつざくら

山家

白簪に蕨のあくやはつざくら

客ぶりはさくらにあるをわらび汁

曉に雨の降たるさくらかな

月は雪はおしなべて櫻ながめけり

上毛烏渥先生八十賀

さくら咲とほ山も何君が杖

世にうむや十日過たるさくら守

豊竹越前司馬の叟、八十の賀

しけるとき

わかや和歌ならば人丸ざくらかな

もる神の廿日も過ぬあさざくら

一活々坊いへるは、活徳の詞に、俳の魔

心といふは、人の師にならむとおもふ故也。此疾にて修行半途なり。いつまでも人の弟子たらむとおもふべし。弟子になりて終るべからずと云々。雪中庵もつね々此事をいひて、御互にいつまでも稽古あれかしとおもふ也と申されし。

海棠やかたけて過る日本ばし
かいどうの花さきにけり永日に
吉野出て又おもしろし三月菜

奥州二本松西玄坊といへる僧、
錢笛といふもの、妙音を聞て
申、いかに伯雅の三位なりと
も、この笛に油断すべからず。

葉二ツの笛にもかへそおぼろ月
鮑むくいせの浦人はる深し
花咲て人にはうとき大根哉
はる三つきおもへば我もあふむ石
一日は不二見ぬ山や赤つゝじ
一雪中庵にて夜話のせつ、門人山幸申け

るは、キ角五元集の中に「しまむろに
茶を申こそしぐれ哉」といへる句、いか
なる事にやとたづねけるに、蓼太の曰。
此事先師更登物がたりに聞しは、むか
し初代の一蝶はキ角と相よし。しかる
に蝶故ありて公の罪をかふむり、伊豆
の島に流さるゝに、友人これかれ別れ
をおしみ、舟場までおくりて、信女の
情をなす。一蝶申けるは、かゝる身の
ふたゝび相見む事かたし。是までの御
懇情、いつの世にかは忘申さむ。我が
の島の事を聞に、大かたの人、魚をと
り日にほしかはかして、江戸の便にひ
さぐと承る。我も又さこそあらめ。然
ばうの腮に、木の葉やうの物をすこ
しづゝいれをくべし。若、さやうのも
のゝ入たるほし魚あらば、蝶がなせる
ものよと思ひ玉へかしといひて別た
り。人、其舟かげのみゆるまで見おく

り、キ角はいとゞむねふたがりて、立
もさらでありし。其後ひとゞせばかり
ありて、キ角が僕、日本ばしの魚の店
にて、乾魚の有しをとゝのへかへり、
かてぐさになさむと、たわゝなるうを
を大にあぶりけるに、むろといへるひ
うの中に、さゝの葉のやうの、なに
ともしれがたきが一枚出たり。のこる
魚どもにも各おなじやうに有し故、扱
扱、島のやつらは、をかしき事をなす
也と笑ふを、キ角ふと寐みゝに入り、や
をら起あがり、蝶がいひし事を思ひ出
し、此乾魚はいづかたの島よりまいり
しものかと、其ひさげる問屋へ人はし
らせてたづねけるに、大かたは八丈大
島よりわたし申よしを申。角こゝに於
て、蝶がいひし詞を思ひ、傍友の情し
きりにうごき、蝶がしたしかりし友ど
ちをあつめ、茶を申入、此干うをよ

し、これこそ蝶が申のこさ(せ)しかた
みなれ。いまだながらへて、かゝるわ
さをなしけるよと、みなくそなたの
かたに向て、はるかに信友の情、今更
涙とよめかねたりしとぞ。角が匂もこ
のときの事なりと、師のものがたり有
しとぞ申されし。

いなさ吹彌生の末や大がつほ
むさしのにて

なしの花有といふなる逃水は
ちるなしを花のみぞれと申さばや
けばく、と旭さしけりなしの花
なし咲る夜をしろがねに價せむ

仙臺つゝじが岡にて

木瓜さくや此玉川はむつの外
菊植る叟や秋にあはむとす
都へは人して菊の分根かな
春さびし露の古葉に夜のあめ
鶯も子に泣雨の夕かな

いざ竹の秋風閑む相國寺
谷の藤泥に尾を曳風情あり

ちぬの浦

行はるや塚のうらのさくら鯛
うり聲はとほ山どりかさくらだひ

上毛のくに侍て

桑子もりつげの小櫛の落かゝり
夜の守護ひるの守や蠶棚
衣川蠶の蝶のながれけり
月もはるの朧に細きかぎりかな

玉東江戸下りに申遣す。

みつげ番にしかられた。うす

雲高尾に長じりすな。

行はるや江戸は牡丹に杜若
ゆくはるのしころは切れて遅さくら
ゆくはるも銀杏の花のひとよ哉
行春や鱉にうつろふ鯛の味
春かへれく、と深山さくらかな

もろこしまでも行ものは

石火矢に船出す春の行方哉

中といふ字をかゝせて、家の

政事をつゝしみ給ふ御方へ

はるの日や有のまゝなる午の影

晚春曲

この月にほとゝぎす鳴けはなの雪

朝日とたしかに申せはつ裕
さくら狩家にかへればあはせ哉
なにとなう夫婦みかへる裕かな
どこやらに女さびしきあはせかな

きのふは、紅にさかりをみせ

し崗生のさくらのむなしく散

て、けふや、うのはなのしる

きにかはる世のはかなさを思

ひやりて、はやし氏のもとへ

申遣す。

花のいろにそめし袂をはつ裕

衣がへは、きとる氣になりけり
こゝろまで酔にあふ日也衣がへ
向ひ同土物いふ夏のはじめかな
・琴のはる三線の夏となりけらし

一鳥辭曰。附句は次の句ぬしのために、
よろしきやうにと心がくべし。鞠のあ
しらひ成べし。猶さしあひ去嫌の多き
ものあり。たとへばかのあふみの筑間
祭などいふ季は、夏にして神祇なり、
戀也、名所也、所名也、句に依ては人
倫 おもかけなどのさしあひ有。むざ
と遣ふまじき季なりと申されしか。
汗ふきやつくまの鍋の二つより
花去て鳥まつ簾の青みかな

十雨齋はじめの夏、一日一万
三千のほ句を吐て、俳道の和
左大八なりと世になりしも、
光陰のつるを早く、二十五
年に成ぬる事よと、今の主迄
懐舊の情を述侍る。

發句を射し名の通矢も九千日
白緑のうら吹かへるわかばかな
大太刀の御朱印もちし若葉哉

鳥辭居士十三題

この翁、なにはにたびねして、
おはしける事などおもひいて
て、鳥明百明の二更へ申おく
る。

葉になりて残るさくらや壬生山家

花丹の功、ますく江林盛木
に名をなし玉へと、にしむら
氏が新宅に

しげれく若葉の花の宿はあり

はこね山にて

夏木立伊豆の海づらみへぬなり
卯のはなや曉の風月をふく
ひとゝせの天地易き四月かな
大かたのみどりを盡すうづき哉
もえぎ地のあやおり亂す卯月哉
一支考曰。月雪花ほとゝぎすは、君にも

あらず、父にもあらず。我らがための
なぐさみもの也。くそともいひ、味噌

ともいひ、人參附子ともあがめて、四季
に心やすき出入のものともいふべし。
擧てよき時はほめ、をかしき時はそし
りてもあそぶべし。心にとゞめざれば
無一物の人なりとて、月花もはらたて
ぬもの也。

龍花會

灌佛や五段がへりもなさるべく

木といふ題にて

庭更に木缺の音かすかななり
こがねある塚とこそ聞か桐のはな
春過てはやさくみかんかうじ哉
香久山の花や見捨て晒うり

閑寓

たちはなや葦盤かへて下手ふたり
橘やならの都のふる手かひ
この殿に人しづめたるぼたん哉

切て遣るあとの明たる牡丹かな

巳の刻のかねをぼたんの花の時

漢相國肅(蕭)何書

無事にして芍薬の花ちりにけり

芍薬やおくに藏ある淨土寺

一はせを行脚の文中に、女性の俳士にし

たしむべからず。師にも弟子にもいら

ぬもの也。此みちに親炙せば人をもて

傳ふべし。流蕩すれば人敬ふべからず。

此みちは專一無適にして成す。能をの

れ省かへりみるべし。

芍藤のちるや落るやいつの間に

芍薬や末の十日の雨に落

千雨のかくしづま有かきつばた

杜若凡のこさぬみづのいろ

其色のひとつに富りかきつばた

からふじて芥子の使の市を出る

愛女をうしなへる人に

芥子ちりぬよしや牡丹も廿日艸

幟を立はじめし観に

紙子着む音たのもしきのほりかな

芥子咲て抑雨とふり風とふき

有所思

白芥子のおのれをしるか花ひとへ

白髪を吹るゝけしの主かな

咲ときや淺間に向ふけしの花

さきつめて莖みじかけの葵かな

上毛小林里旭が父を悼。

老松の千代を譲りておちば哉

そらまめやしどろに花のこむらさき

妙觀が刀花袖に用んや

竹の子も切盡しけり明知(智カ)風呂

若竹や月の細りも二十四五

一蓼太曰。都て人の句を聞に、其場其人

貴賤老若にかけて、景曲觀相のうへを

以て辨ぜずば、あらはに口をひらくま

じき事にこそ。新古の沙汰に及ばむも

おなじ。たゞ人の句を聞て、其まゝ成

ほどゝ早速に感じたらむは、其人の俳

諧しられてはづかし。

麥秋やよしのゝおくにこもるとも

加藤二にめし喰せけりむぎの秋

鳥田驛辨(桃カ)舟にて

苗に其たびねなつかし手作麥

かつらぎの神わざなれや麥の秋

麥秋や嵯我(峨)もさがにはしてをかす

宇治殿のせうじ立けり麥のあき

閑居

花落る江によし雀すずのはつ音哉

よしきりの鳴止むかたや筑波山

よしきりのよし一株にたか音かな

蜘蛛の糸つくるふ雨のはれ間かな

やぶれけり袋の蜘蛛の親しらす

金春なにがしかたにて

僧脇の月は出にけりほとゝぎす

ほとゝぎすくゝり枕の茶も匂ふ

禪鞠の膝に落けりほととぎす
紅の舌一枚やほととぎす
ほととぎす月の暈着の連歌哉

すみよしにて

遠里小野、油なめたかほととぎす
はからずよ向さまなるほととぎす
ほととぎすぬけ出しあとや三ヶの月

三井でらにて

寺といへば初音といへばほととぎす

東都の往返五十度に及ぶ。

百不二月月雪花にほととぎす
東山嵯峨はみぬ戀ほととぎす

一吏登翁の云、世にはらみ句といへる有。
趣向うかびながらも句を惜て其場をま
つ。今の世の懐劍辨當などいへるさ
もしきこゝろとは、おなじ日にかたる
べからず。むかし、源の順が、楊貴妃
歸唐帝思 李嬪(夫か)人去漢皇情 か
ねてたしなみ侍りしが、對雨窓月とい

ふ題を得て、この句を出せし。津守の
國基(基)が、うす墨にかく玉づさとみ
ゆる哉 のうたもおなじ。

ふし柴の加賀 白川の能因 なども皆
このたぐひなり。はせをの翁も うき
世の果はみな小町也 といふ句を、ひ
さしくこゝにかけて、品かはりたる戀
をして といふに出せり。

四火既にもぐさ盡けりほととぎす

かまくらつるが岡にて

なけよやよ百万たけ郭公

三所權現にまうてし頃

きゝ初て二百町坂やほととぎす

一雪中庵云。一座の連衆をかうがへて、

むざとさしあひの句をなすべからず。
むかし、はせを翁の杉風がみゝのうと
きをあはれみて、つんぼの句をせられ
ずとかや。是一座のさしあひくり也。

川ほねや申刻さがりの使者男
月もたぬ露こそなけれ苦のはな
物おもひ苔のはつ花みる日かな
かんこどり狩や都の腹ふくれ
千觀が馬洗ふなりかんこどり
よしきりの岸うち過ぬ閑子どり
かんこどり江戸を去る事八百里

流羽を憶。

音をいれし末の十日やうぐひすも
一風雪曰。句を吟するに、なまりてはく
ちをしとて、ひたもの都にのぼり、後
後は少しも訛らで、執筆へ句を渡され
しと也。

花の京かまくらの夏はつ經
水かけてかつほは一世のきほひ哉
南嶽の箔のしろみや初がつほ
おちかへる八百町や小鏝うり

粟津奉扇會

腰にあるうちは不易のあふぎ哉

これみつが蜘蛛捨にたつ扇かな
廿年女あるじのうちはかな

山中

麻生てゆがまぬ家はなかりけり
乞食の世にある夏とみゆるかな
朝風や魚の血こぼすみさこの巢
紅うらの袂こぼるゝ野ひるかな
夕すゞみ地蔵こかして逃にけり

左專道友三寺

禮まゝいり各涼し伽留羅烟
子子や方四五寸の和田のはら
子子に水そゝぎけり寺参り
あけがたや鳴音血を吐蚊のあゆみ

伊藤なにがし輔役加智の賀

めでたき事のかさねさせ玉

ふ方へ

御庭までも皮脱竹のきほひ哉
蚤夜毎不二の五文字の狂ひけり
江戸みぬはをとこにあらじ閑子どり

紫蘇昌や雨の獄上のうすくもり

一キ角云。さしあひくりといはれむより、
まづ句者といはれよとは尤の事也。句
者と成ば、さしあひは自由なるべし。
たとへば非常のとき、なりもの、音曲
今より御免とある。早まちはかねて出
さむはよからじ。一兩日もさしをきて、
扱可ならむ。句者は此處につまらで外
のものを作せむ。さしあひくりは六句
めづゝに、松の句を出さめ。

三界無安といへる心を

立山の人京に寐て蚊のちごく
拂ふ手にはかなや蠅の雨やどり
うきゆめのあるとき嬉し蠅の聲
高安の戀はさもあれめしのはへ
蠅うちや上手になりし我こゝろ
扱こりよ餘り葉末のかたつぶり

此句は、位のぼれる人のす
さめられし事よせて申侍
りし。

かたつぶり這合たりつの大師

事さまやめでたき雨のかたつぶり
雨の日や日の岡のぼるかたつぶり
裸子の夕がぼさしてかくれけり
手にふるゝ團のかけや水の月
萱のとう雨のけあげのかひなくし
夕立やおくれし雨に日のうつり

許六のほとゝぎすに對

ひとしほやさ浪くどりし鯉の味
月の夜はおのれを遊ぶほたる哉
ちやうちんにあたりて黒き螢哉
夕かぜやほたるの中の洗ひ馬
一淡々曰。詩は長刀、和歌は刀、連歌は
わきざし、俳諧は懐劍也。こゝろ切に
おもひつむれば、其利事はやく始皇の
胸先をさすにいたる。又長くば其所に
いたりたらむか。むかし戀といふ題
を玉はり、
夏瘦と問はれて袖のなみだ哉と

いひけむも、即懐劍のきれ味なり。
なつやせや西日さし込々竹格子
むらさめや灰の落つく藍晶
小さめふる空やむくげの朝ぼらけ
さゆり葉やむらさめ過る蛇の聲
水僊の根をほす軒のあつさ哉
日さかりをしづかに麻の匂哉

しのお戀といふ事を

吉田屋の紋に喰れけり伊左衛門

一長嘯子の云。はじめて物を誦し、よみかぬるは、夏中人の家に入てしばしあれば、そのもの、かのものとわかるが如しと。

かたばらやなべて世にある人のさま
かたばらやさもなき人の折目高
かはほりやせても苔の花に鳥

宇治にて

かはほりや大黒彫む板間より
譲られてけふはつ舟のうがひかな

その外の罪はつくらぬ鶴飼哉
月入て鶴川に高し老が聲
月みせて船に子を守うがひかな
麻(淺カ)生庵野坂三十三廻、
無名庵にて風律興行

塚に生ふ藜もゆかし杖のあと
さらでだに乳母かしましき粽かな
歌によまれ湯にたかれたるあやめ哉

五月五日、加茂にて

のせ勝て埒を出たり馬の汗

東武馬光卅三廻、石湫興行
ありし世のそのすみの香や入梅じめり
降事にみなしておりぬさつきあめ
どの雲のふるともみへす五月雨

春園園蝶糺し、五十の宴催
されしも、まだ四とせのほど
ぞかし。あはれ七の叟のむし
ろがみにもとちぎりしも、今
は空ごとくなりぬとて、龜章
山父のもとへ申遣る。

百とせも半鳴海やさつきあめ

一更登の云。我句を人に聞しめ、きこへ
がたくいふものあらば、よせ直すべし。
口論のいつも我に理有がごとし。樂天
が老婆に問ひしも、この事なりと申さ
れし。

二つめの清水に足をひやしけり
吞てから宮守のみゆるしみづ哉
媒のほめのこしたる用うたかな
おもひかねて亭桶に老の田唄かな
田植唄嫁に拍子をすゝめけり
加州沼水、國にかへり申さる
るに

かへる山雪のしら山夏ながら
豫州松山法秀寺南嶺和尚にわ
かるゝ詞。
月日は百代の過客にして、行
かふ人も旅人も。さればい
くかきり人のうちにて、かく
寝食を俱にするは、ひとかた
ならぬ因にや。去ば再會たの
みありと、別れにのぞみ互に

手をとりて一笑す。

相蚊やに何かくす事 夏の月

己亥夏、偶浪花舊國、余與同

上洛、到草津驛二而分、手時有

歌。

共是東西過客人

同行千里日相親

別離今朝暫分手

再會尙期明日辰

豫章南嶺艸

あぢさゐや人はいつまで同じ事

線繡花の飛鳥川にや生ぬらむ

丸裸これほど暑きことはなし

あつき日や濱に下魚の算をなす

周茂叔畫

ひとり聞時や蓮のひらく音

から網の岡にほゐなし夏の月

涼とる舟漕ぬけてなつの月

道問へば川にそへよと夏の月

ある人の文拾ひけりなつの月

二柳庵東行に申遣す。

古曾部のあるじも扉をひら

き、山崎の坊様も夜具のきた

に及ばむは、このたびの行脚

成べし。

留遣ふいほりはよもや夏の月

東西夜話に、支考の曰。かゞり火にか

じかや浪の下むせび かゞり火におど

ろかす魚はあまた有ながら、むせぶと

いふ一字をよせていはど、かじか小海

老のほか有べからず。句は其魂を見、

本情をとるべし。

ある人云。風雅のりくつといふはいか

に。曰。風雅にりくつなし。おのゝ

こゝろのりくつ也。人の心をまなぶべ

し。句をまなぶべからずとなり。

水守守七世の夏にあひにけり

ひむろもり近くめしなば消ぬべし

なきさしてにべなき蟬の行方哉

鳴盡す終りや蟬の水調子

一つねに風流の心なき人も、ものゝ善あ

しきに感じて、おもはず秀逸の句あり。

遠江の國に、あるひとの子をうしなひ

て、其ひとゝせのめぐり來し頃、

去年まで叱つた瓜を手向けり

かく千万のあはれをふくませ申出しと

也。

葉をもれて涼しや瓜のひさがしら

雪中庵の畫讀、からす瓜の一

軸、丸形氏へ遣すとてうら書

に

我園のたくれなるぞからす瓜

はつ茄子公家ひと口にまいりけり

ほの明のはこねこしたりはつ茄子

手にふれば瑠璃やくもりて初茄子

あつ盛の畫

はつ茄子いづこに薄刃あてゝみむ

ぬれて猶雨の水鶏のさやかかなり

一雪中庵云。キ角がつけ句に、毛抜にも

名を給ふ君が世とあるは、かの尾州な

ごやの毛拔師南方といへり。孔明出師の表に、深く不毛の地に入て今南方定と云々。不毛といふよりして、むかし、近衛殿下の被下し名也と。

たとへ盡しの榮耀に、もちのかわ、といふ事に

京の人や鉾見にのぼるひがし山

祇園會

我子にていへあれにほこの兒
宵かざりあれほこの町山の丁
いつはあれど水みる夏の都哉
雪中云。句振は我生れのまゝにして、
修行ありたし。つくろへるはいやみな
り。土地によらずして、句に都ぶり有、
鄙ぶり有。高雄といふ遊女の、ある田
舎人に異見しけるは、そこには、いな
かにて歴々の御かた也。此ほどは江戸
衆のはやり詞など似せ玉ふがいやみな
り。能おとこと、金つかふ人と、はや

り詞に、傾城は倦てゐれば、只ありの
まゝなるが可愛なり。其ありのまゝな
る人に、おろかなるはなきものなり。
ゆめくせ玉ふなと申せしと。一座
せし眞支といへる人の物がたり也。か
かるあそびものうちにも、名だかき
は心の置所格別なり。しからば風雅
も。(原本以下ナシ)

一希因云。大かたは初のほどめづらし
く、様々くと句をねり、二の折よりは
退屈して、いゝがちの様になりはて、
三四の折より巻の面あらめに、一巻の
模様をうしなふ也。是つれぐにいへ
る、木のぼりの上手といへるは、木に
のぼる時はいはで、下りる時あやまち
せそと、ひたものいゝしににたり。
名聞に四條へ出たるすゞみかな

洛のてふむ、浪花に下り申さ
れし折、はじめて逢けるに

にごり江のこゝる遣ひもはちすかな
今は三十餘年の知音なり。

雪中二世東登居士二十五廻通

題 江戸深川 要津寺

定基法師のとははも、けふの

法筵におもひいでられて

本堂に連のかけさす夕日かな
さらし井やをとこ世帯のけふはとて

入江子を悼。

酒ひやす泉には唯月ばかり

奥州せのうへ等舟出店の賀

呼井戸にに猶手がらある清水哉

に(衍字カ)

さらし井や家のうちなる六玉川

一書林何がし、わづらひて心地死ぬべく
おぼへしに、菩提所の和尙を請じ、末
期の安心をすゝむるあらましにて、念
頌に後生の大事を述べられけり。なにが
し、むづかしきをのこにて有ければ、
おもき枕をあげ、様々の御しめし、

ありがたく存ゆ也。ひとつ御たづね申
度事のゆは、みな死ゆ跡にて野おくり
のせつ、御引導と申事きゝ、さだめて
能所へまいる事を御教被下ゆ事にゆ半
が、折角仰聞られても、其時は息たへ
耳もなし、生たる人のみ承りゆ。あは
れ御情には、只今仰下されたしと願ふ。
和尚、すつとたちて、佛前にありける
法然上人の一枚起請をとり、よみ聞せ、
これ有がたき所へ行道中紀(記カ)也と
被レ申。病人大にさとり、扱、けつかう
成道中紀にてこそゆへ。有がたしく
と、息のかぎり念佛し、往生をとげ申
ける。これ書林に對して題のうごかぬ
處也。

三五粒連に落けりなつのあめ
夕立や江戸は傘うりあしだ賣
加賀の紫狐、はし立へ行。
先にたつ丹波太郎や道しるべ
阿波加賀江戸の風土十餘輩、
荒陵山下の天曉院にあそびて、
見わたる名所古跡を題にとり、
ほ句するに、天王寺を
舍利拾ふたもとは玉の風かほる
ひるがほや轍にくぼむ作りみち
鼓子花やかくれ住る女蜘蛛
ひるがほや眼の玉のちりてのち
一淡々、猫を飼けるに、我喰けるめし夜
菜などを我箸に分遣し、膳の脇にてく
はせけり。門人の曰。先生餘りなる不
行跡の飼せられやう也。猫のくせあし
く成ゆ半と。淡笑曰。さればとよ。初
め二三疋の猫は隨分と行儀に飼つけ、
首玉なども奇麗に、諸事めし遣の女共
の取斗(計)たりしが、いづくへかぬす

まれ、十日と内の用にたゝす。必竟う
つくしく飼たる故、人もほしがる也。
依て此猫は飼しはじめより、かくあし
く育たる故、一二度は盗まれたれども、
行儀あしき故追かへされしとみゆ。い
づれも能御考ゆへ。猫は所詮ねづみの
書物を荒すをふせぎの役が専一也とみ
る時は、餘事にかまはず、唯鼠の役と
いふ所が眼のつけ所也。俳諧も又かく
のどし。こゝが眼字、それが其題の專
といふ事を見さだめたし。
風吹てひるがほの花みつけたり
夕がほに角力が母のすがたみむ
夕がほや戻つたうしの臭^{ニホ}見える
勢州白子山觀音堂奉納。江戸
升屋貞國勳進の畫馬
禮まいる彌ひらけめうがの子
抱かごやかくしかねたる山かつら
不二庵の句に、頑に貞女立ぬ

く水鏡哉 とありしに句兄弟
せむとて

手もさゝじ兄の抱かごころぶとも
抱かごやたしか妹は玉はゞき
むしほしや紙魚道ながら物書す
むしほしや立いづる戸も桐柳
花見小袖うつりにけりな葛水に
むしほしや鈍く傳へし腰の物
はせを翁の文に、他の短をつけ、おの
が長をあらはす事なかれ。人をそしり
て己にほこるはいやしき事也とかゝれ
し。今世の中大かた蕉翁の教を守とい
へ共、この遺訓を守もの、百人にひと
りふたりならむ。

名越夕殿

子をつれて茅の輪を潜る夫婦哉
夕かぜや夏越しの神子のうす化粧
形しろや戀しき肌もふれきなむ
五十くしに罍の烟かゝるなり

洛の几童、はじめて相見しけ
る時

これからの實になる秋を隣哉

なるみ、千代倉鐵屋、子も
とにたづねませる折の文を
こゝにうつす。

難波がた安井舊國のぬしは、もとよりのち
なみ深かりければ、此處に至らばたびのつ
かれをも思めむなど、伴なふものにもかた

よき人
あ
秋を

一西山宗因に俳諧の去嫌を問に、因曰。

むかし昌琢新式を講ぜられしに、何は
なに嫌ふ。他は准之と云。この准
之とあるが第一の要語なり。其准之
とある、准る人の了簡、よきもあしき
も其人の旨に依る。俳事又准之と申

されしとか。

元日のうら打風やけさの秋
形しろやあとに流るゝあきのみづ
大坂やまつりの跡のあきのかぜ
秤口のしに聞えてけさの秋
秋たつや持佛の箔の目にかゝり

りなぐさめて、夜舟の紋をうち拂ひく、
漸三津の濱邊にあがり、大江のあるじをた
づねけるに、子が出坂をましまらけ玉ふの
志あさからずなむ侍れば、誠にさくやこの
花の都人の情、かのから國の梅酸のそらこ
とにはあらず。その厚を謝して以、一句を
つゞり賀し侍る。

乾く日も更になにはの梢かな

己卯中夏日

藏六岡
七十二叟書

冬秋 げんざ俳

がつしりと緻に音ありけさの秋
桐ちるやむめの暦の下の巻

鴛鳥といへるものを

桐ちるやみぬ唐土の鳥はみせ
けふとくれて二日のかげも秋の月

なりひら、清女などのこと
葉を思ひて、枕の草紙の趣に

したがふ。

彦ぼしよこれ牧方の馬やらふ
ほしあひや石ともならで待謀せ
中に落るほしや七日をよしの川
しのぶれどあの光也ほしの戀
御破せし水にもあらず天の川

ある彼家にてほし合を

七夕の今宵大ぼし力彌かな
此句餘りけやけくいかゞ也と、申さる
るかたおほきよし、沙汰有につけ思ひ
出し事有。ひととせ東武にて雪中庵の
附句に、おれも是れから醫者になるは

づといふ前句に雪中、ひそくと矢

間千崎ほり小寺と附られゆ。其席魚
汝連丈などいさめて云、おもしろき句
ながら浮世めきゆ半。こゝは間神崎な
どゝあらむにやと申。蓼笑て、夫にては

近代にて遠慮もあり、實にはまりても
いかゞなり。都て和朝のてあそび、源
氏いせ物がたりなど、上古の人あなが
ちに不可尋其作者只可翫詞花言

葉而已と戸部尚書もおく書有。これら
をいふにあらねど、俳事又八雲の末な
れば下略。

「ちからとあらむには風流なし。七夕の
あふぼしとつゞけて、力彌とされたる
宗因の風刺をおもふ斗、ひととせに數
千の句をいひ捨るうちの我なぐさみな

り。我にはゆるせとありしひとつの辭
と、大様に見なし給はれかしと。

戀くて花よりほしの七日かな

送られてみなしらぬ火と成にけり

鶴鷹かゝげて商ふ叟を見

中くに死なで此世を麻木うり
草市やいづれの家のたまの床

瓜茄子きゝげを重しに

また棚の花ぞむかしの櫻鯛
魂だなや雛傳し影法師

たままつり八千世諷ひし一座也
うらやまし迎鐘つく他のおや
たて濟す其夕ぐれや高燈籠
影さすは月に成しよたかどうろ

露下梧桐一葉飛

棒桐のいま二葉にとなりにける
子はかくしおやはかくれておどり哉
おどり子やまだ片形のたつたひめ
真中へ旭のいづるおどりかな

人のおやのちやうちん赤き踊哉
さとの子のおしやられたるおどりかな
上毛小埜地藏奉納

盆のはへ地藏まつりにしくはなし

瘦たかよ背中みせけりぼんの月
初月のかげかた過ぬ芋の莖
桐ちらできのふも過しあつさかな
舟はりの露にかげろふ花火哉
八朔もからゝ三八あけはなれ

途中吟

いなづまや不二の麓のはなれ杉
稻妻や乞草臥しあめの空
いなづまや鐵葉つけかゝる妹がかほ
雨の秋うらがれてみゆるあはれ也
追はであれ秋喰ふ馬糞にかゝむ
ちる萩にうたれて萩の咲にけり

一空摩居士物故のまへ、今の雪中庵のす
るがの國に行脚として、たび立ける暇別
にとて、あさがほの花を畫て、ちるとも
ちらめ舜のとありし俊成卿の御うたは、
かのから國の桓温が枕をなでゝ、人と
生れては、たとへ臭きものといはれて
成とも、世に名ののこれるやうにとの

心ばへにおなじ。つとめよや道の修行
としたゝめて、

あさがほやおろかなながらも花心
白麻と兩人へおなじ様に書て渡されし。
其行脚の留守のうち故人となり申され
て、今はかたみとなりし事よとて、完
來ぬし右の畫讀をみせ申されし。遺訓
の心通じけるにや。

おもひ出や舜の花の手折るゝ
舜に鉦鼓のあふてあはれなり
あさがほや今更ひるをふみこたへ
これ秋のすまに申ける句
也。

あさがほに傾く塔のしづくかな
これも元興寺にての吟なり。
舜の松に并びて旭かな
手折間に秋風たちぬ女郎花
吳逸が家を訪ひて

肌寒き秋のちからや塚篋
一なるみ千代倉蝶羅云。我は酒屋な

れば能酒を造りて、俳諧はおろふしの
なぐさみ也。知ある人の藝を好きたら
ばあそぶべし、ふけるべからず。狂ふ
は彌あし。其所は飛脚屋なり。通路
の事にはしくば、扱たのしみに遊ば
れよ。家を捨、業を止て名人上手にな
るは夫人によるべしと申されし。又、
江戸藏前祇徳といへる人の

風月より家業はおもし傘の雪
とかゝれしも、これにおなじからん也。
酒造る桶に音ある夜寒かな

尾陽鉄叟を悼。
この頃おほき世や更にとな
き人をいためる、いにしへ人
のことばも思ひ出て

世のゆめや西へ見おくる秋の雲
嵯峨の重厚、加吉川の上李な
ど、花やがうらに案内して

雨の日の薄にも似た案内哉
聲かれて夜寒の禿不便なり

かへ鶯の曉寒し宇都の山
朝寒や就くと蚊のうしろ影
月落てひとすち蘭の匂かな
きのふみし馬昇入ぬむくげ垣
夕がほの實も市に出て朝寒し

麻生庵の詞を思ふ。

長松がおやと申て西瓜かな
鳴うかと髭かきあげてきりくす

人家

きりくす猫にとられて音もなし
ふたりぬる夜は面白しきりくす
媒に追やられけり蟋蟀
とんぼうや岩切通す水のうへ

關東道者のよし野よりいづる
に

とくくの水も呑だか赤とんぼ
とんぼうや秋ともしなき眼玉

信州鏡虫庵承和坊勳進

みのむしよ月の有夜は出てかたれ

月にも鶴人、花にも鶴人とあ
けくれむつみ交しも、いつし
かそこの國にかへりて、能友
ひとりうしなへる事を

秋はものゝ松見ても其人戀し
霧雨に小むろうたふはたれが馬

耳鳥齋ぶりの書をかきて

蟾螂が斧九太夫やよこ車
松むしやひるをば何と瓜のさね
芋うりや月にわかれし秋の聲

からめくも秋の聲也夜はまぐり
日の辻や雨こぼし行秋のくも

北濱といふ題を得て

雲こぼす雨にもちらす市の秋
鰯のゐる海たいらかに秋のくれ

赤瓜の書

洗へとや三千人のあきのみづ
をとこ山放生川のほとりにて

鯉桶の水そゝぎけり女郎花

はせをの翁、加賀の一笑が塚にて、「塚

もうごけ我泣聲はあきのかぜと。其

後に駿河の府中、籠つくりの九兵衛と

いへるおやちの死したるに、又此句を

書て手むけられしは春なり。門人かれ

これいぶかしく思ひ、たづね申けるに、

答、九兵衛が死したる、頓に聞ておど

ろき、一笑を悼たる時の心と同じく、

外にいふべき詞なくして認たり。世の

人の噂はともあれ、我泣聲は春ながら

も秋の風とおもふべしとなり。八文字

を換骨して春となし申されし情、鬼神

も虚空に聲をのむべし。

見ぬ戀や夜のあらしの萩をうつ

あきの風まづ萩に来てけたままし

雨過て庭の萩はらしづかななり

九つの花みな空しけいとう花

若たばこぼしたりいせが家のあと

青なしや薄双わたせばあきの水

江戸青山邊にて

南瓜の一番首や組やしき世の中や紫蘇にまかるゝ唐がらし唐がらし舍利に成てもまだからし木がくれて大内山の唐がらし良能、あるとき一巻の變化を説申されし序、物がたりに、むかし淨るりの作者近松門左衛門、國性爺といへる狂言をつくり出して、大あたりせし跡を、猶おもしろき趣向もがなと、枕をわりし工夫にわたる。其時の芝居ぬし竹田近江申は、作者のころには左こそ存ぜらるべきか。去ながら大あたりのあとは、大体すらくとしたる事をなしてをかるべし。國性爺にてよほど徳分あれば、一二年不當りしたりとも、我等式がたべいほどは澤山なり。其間は古きものにてても出し、其内には自然とよき狂言も出い半。夫ごうへ、それよりうへと趣向に趣向をかさねたらむ。

かくもて行かば我家業は盡果申さむ。たゞ天然にまかされよと申たるは、一道に秀たるものゝ詞、諸道に通じ、俳諧の一巻の變化も、この心專要なるべしとかたられし。

ならの宿にて

繪うつ宿の外面やししかの聲
雄にみせそ雜水にひたす鹿のつら
夜の明て山の高さよしかの聲
ひとしきり鳴子音して日は入ぬ
鳥有てけふもくらしつなるこひき
百舌鳥鳴て曉杉のしづく哉

谷風禊之助が書に

關角力體とともいいでける歎
あの腹にやどりしものか角力取
撫られて母に身をまかす角力哉
すもふとり井ぶや雨のひる餉どき
のり掛の角力にあひぬうつ山
からくして廁を出ぬ角瓶とり

防人の名だゝる谷風雪見いづ
み川など、呼れしつわもの共
も、早二代のものとなり、見
物につれだちし好人の家も、
既に二世三世の人に伴ふ。我
身ひとつはとよまれし歌には
似げなれど

五十年角力を見たり福祿壽
大井子がめしも喰たか角力とり
出女の物ぬふかけや秋のくれ
不知明鏡裡

拔盡すしろき鼻毛や秋の暮
百里來て椅づとめやあきのくれ
妹がりの分別いでぬあきのくれ
新宅に馳わたるや秋の暮
大いそにて

鳴立てあとに宿引をとこ哉
たちもせで鳴二羽ならば夕日哉
嘆く深草裏
むし聞や古禰宜ひとり誘ひ出し

なくとばかり聞なば虫の笑ふべし

籠明てうれしき 虫の聲聞む

肌いれてうづら聞けりかはらけ師

磯ばたや日のさす粟にうづらの子

風ぼうくうづら見せたる草のはら

一宗祇師法師名月の句、ひとよせの月を

くもらす今宵哉 又雨のふりけるとき

も、此句を誦して用られけり。詞は古

きを以て、心あたらしくせよとのしめ

し。いろは四十八文字みな切字也と、

申おかれる故人の金言こゝにありと、

淡々老人門弟にかたられし。

ぬれ色や飯はま一濱朝の月

月の夜や聲細くはまとあぶら賣

藏カ（不明、物カ）亭の反古を

さがいやまして、いとなつかし

家の兩柳、天王寺の島井にの

こされし事などおもひいで、
月にうつれ忘れてしのぶ人のかほ

百千万劫善提種

ひがんの蚊纏迦のまねして喰せけり

几十ぬし、須磨の行かへり九

度になりし折、一集を催され

し。猶たへず通行し玉へとて

見のこすな月見の松もいま二本

此二本といへる事たづねし人のありし

にて、おもひいでらるゝは、いつの頃

にやありけむ、殿下の君立入の去齋工

をめし、御襖に須磨の風景をゑかくべ

しとなり。即つかふまつりまいらせし

に、能出來たり。たゞし月見の松今二

本たらでやと仰あり。かの工は須磨の

ちかきあたりにもまれし者なれば、い

かでかこの處の事、あやまりぬべきと

おもへども、心すみがたく、其後國に

かへり須磨に至り、月見の松をかぞゆ

るに十一本ありし。我齋て奉りしは九

本也。ふしぎにも恐入て、御内の衆に

うかどひしかども、いかにたゞうち笑

ひてかたられず。としを経て又承りし

に、いつの頃にか、しのびの御遊あり

て、よくおぼしめしこめられし事と、

みそかにうけ玉りて、おどろき入しと、

即齋工のものがたり成し。

をさまれる月に鶴なく夜半哉

入月や鷗うのわたるあまの川

荻なりて月半天にさやかかなり

有岡のさとにあそびし頃、日

東ぬしの案内にて、月もやど

かるといひけむ昆陽の池の堤

を巡れば、今宵の清光いづく

にかある、唯水面しろかねを

うち敷たるにひとしく、一睡

一物の外さらに物なし。

影満て池一輪の月夜かな

鎌かぢのまだねぬをとや秋の月

酒かふてかはらむ月の渡し守

野に立て月存分のながめかな

北上川に舟呼聲の衣毎に聞え

てさびしく、又あはれに秋の
さまを思ひ、國分氏のもとへ
申遣す。

舟に聲巴狹(峽)の月の猿よりも

不二庵伊賀へ、月見にまか
で申さるゝを

我みちの魯國の月見うらやまし

ふしみ登ぶねのかしましき事を

名月はてうちんゆるす夜舟かな

信夫吞淚懷舊

水流れ人去て唯月ばかり

鐵屋几掌は万にたのしき更な

れば

ひとりかへる道又月も清からむ

月の夜、露江にて

我も見たり七十年の松に月

まつ宵や情のまじるうす曇り

おにつら曰。誹諧の道はあさきに似て

ふかく、易に似てつたはりがたし。初

心のときは浅きより深きに入、いたり

て後は深きよりあさきに出るとか聞
し。むかしは初中後を経しかど、今は

其修行する人だになく、心みなさきに

はしり、いつしかひとゆるさぬ上手

にはなりけらし。これをおもふに、誹

諧はたと當座あだ口にして、根もなき

いゝすて艸なりと、かろき事におもへ

るなるべし。これも又和歌の一躰とか

きく時は、かりにもあさくしくおも

へるは、ほいなき事にぞ侍ると。

名月や月の名所は月にあり

花雪と見捨くゝて月の鴈

粟のはなふみし夜もあり今日の月

あかつきの雨にもあへりけふのつき

西みればまだ夜はふかし今日の月

我家池魚の災にかゝりて、人

人ひそみつゝしめる中、おの

れに過たる造作のさま、いか

ひあほう宮とや笑玉はむとて
足代の山元としてけふの月

名月や更て皆鳴荻すゝき

月今宵荻も音せよ萩もちれ

十六夜や雲により添ふ月の瘦

あさがほのかげかすか也十七夜

夜半興行横一夜松

北野天満宮奉納

御意に入む北野ゝ森のむめ紅葉

紺かきの火おこすかげや秋のあめ

あきの日のくれて馬呼ぶとほし哉

山みえて秋ひとゝきの入日かな

仙臺しほせ布朴かたにて、和

歌の友のよりて、おのゝ當

座ありけるところへまいるあ

はせしに、煙のひとつ餘りぬ

るに、ほ句いたすべしと申さ

る。

名所礎

衣うてやあつさはきのふけふの里

夜は夜とて箔やがつまの礎哉
若衆や近所のきぬたうち歩行
媒もきぬたうちけり宵のほと

雨催ひ須磨のきぬたの通ふ也

一良能曰。初心しんしんの修行は、いかにも無分別つよきとおもふほどの句をする人、

上手名人の場へもいたるべし。初からおとなしく妾情とよひ侍る人は、功

者といふ中途にて終るべしと、細川公の耳底紀（記）にもしるさせ玉へり。都

ての藝能みなかく有べし。

から衣下手にうたせてね入けり

寺の礎念佛にあはで月白し

母のきぬたつま持べしとおもひけり

聞 懸

留主の碓江戸へひゞけと打たりけり

一雪中庵曰。ほ句を案するにこゝろにう

かび、我にめづらしく、したゝめ見るに、不レ思も前人の趣向におなじやう

なる句がいづるものなり。是かねて聞感じ、心裏にのこれるものか。又は案

じ其境に行あふもの、故人の句に方弗

（琴齋）たるあり。皆好の道よりいづる

ものにして初心しんしん悪功の入たる人の、他の趣向をぬすみて二字にじごを入かゆる事

などゝは、混すべからずとかたられし。

我もちか頃、

後シテや月のおもても瘦女

飯だこや朝むらさきのひとしほり

水鳥のかしらならべてあさ日かな

猶去秋の句、ぼたもちや小豆のかたにあ

きのかぜ と案じて、我もをかしく人も

めづらしと申ぬ。後ふと江戸の春來が東

風流といへる集中に、附合の句、ぼたも

ちはあづきのかたに秋の風 とありしに

おどろき、句帳を脱したり。故人の句に

作者のちがへるもまゝあり。かやうの

事にや有けむかし。しかれどもつね々

の排力を見て、人の句をひらふものと、

古人今人の句に同巢の句をなすものと

は、一がひにこゝろうべからず。人こ

そしるらめ。我句の事をいふにはあらず。

世情のあらましをのぶるもの也。見む人

ゆるさしめ。

薬頭の眉しらけたりあきのかぜ

吹ぬける 鱧の口や秋の風

反かへる 鯉のひものやあきの風

いつしかにかはく砂糖や秋のかぜ

北越のたらはしを

三越路や雪に追るゝあきの風

八十島といふ所にて

あき風よのざらしぶりの歌聞む

洛の蝶夢、あづまの巻阿など

伴ひ、すみよしの升市に詣て、

高拜殿千珠満珠の丘などおし

へ待て

松に月玉出の岸と申なり

おなじく十五日、四天王寺の

念佛會、俗人の舞樂をみて

月さすやはちすのうへに舞のかけ

夜半亭有文の二子を伴ひ、す
みよしにあそびて

たがうゑし松にか千世の後の月
日のいろや野分しづまる朝ぼらけ
木犀のおもひ出しては匂ふかと

杏谷子へみづから彫し石印を
おくりて

おし分てめでよ花のゝ品さだめ
手折まじととも数ある花のはら

川こす人の直段をきはめて、
八十文川九十文川などゝいふ
も

水に日の價や秋の大井川

義中(仲)寺芭蕉翁家名録集

とりとめた風こそ見へね花すゝき
花すゝきふかれながらに日は入りぬ

一會呂利は滑稽の人也。太(太閤秀吉公
有時諸臣に向はせ玉ひて、世に恐ろし
きものはなにならむと仰あり。君こそ
恐ろしきものゝ覆上にていと、一同に

申あげたるに、坊が曰。御前様ほど恐
ろしからぬ物はなし。手柄をすれば御
ほうび、あしき行ひあれば罪を御糺し
遊さるゝ。よしもあしきも我心にあれ
ば、君は恐ろしきものにこれなし。た
だ世に恐ろしきものといふは、無分別

ものにとゞめ申たりと申上ければ、公
大きに笑はせられ、諸士もあつと口を
閉たりしと。からくこの東方朔、我朝
の杉本、あつばれの俳諧なりと、する
がの乙兒はなしなり。

駒牽やけふ切立の白ふとし

狸狸と號し手水鉢に

伯博雅に柄杓とらせんあきのかぜ
いさ攀てきぬた聞たし塔のうへ
細腰や麻麻覺る老もたつ鹿も
大かたの草におくれて尾花かな
江戸曙鳥子をおくりて
まねくくらむおくる薄にまつ尾花

一蓮二坊くすの松原にかける。この頃一

般の才人恐ろしき詞をもて、針灸秘訣
の諺をのみめづらしといひ出たるに、
しらぬ人はしらす。知るものはいかに
淺ましとかおもふらむ。下略

此しらぬ人はしらす。しる人はいか
にをかしからむといへる。世上大か
た此そしりのがるべからず。

川口道遙

淺づまに鱗の雫をあびせけり
少將にかしらはられしふくべかな
なにかしの殿に似たるよたねふくべ
薔麥咲て花の都とおもひけり
そばの花峰は淺間の夕烟
芽を踏てはおなじく惜惜小めろ哉
狩人にたけ守めでゝ山易し
二の足にふみ潰されしきのこ哉
放野群牛引骸体
いねかりて天地にこわひものはなし

ふくむ木を落して雁のはつ音哉
船たで焦る烟のすへやかりの聲
雁鳴てきくのひと枝つぼみけり
花と呼ぶ鯛より鮭のもみぢ哉

九月九日、高津の宮に詣。

たかきやにけふは粟むす烟みむ
酒ことし一二の船のきほひかな
雪も解よ不二見て過る新酒の香
細川玄旨法印の我も大回し三段ぎれの
仕やうは習たれども、いまだせぬほど
に、もはや一期すまじき也。人のしら
ぬ事つよくしたがるは、まぎらかしの
下手の事也。

さればこそ花におもひし野分哉
紹巴が一段ほめて、扱かやうのほ句は
重て御むやうなり。さあれば人がした
がりてあしき也。耳底紀(記)にかきた
まへり。

孔明がやぐらの琴、よしつねのひよど

り越、それらは無據事にやあらめ。今
どきたまく、物おほへたる人の三段切
素秋など、好ていたさるゝは、きのど
く也と魚汝のはなし也。

置々や露菊よりのちは花もなし
あらそはぬ秋とは菊の上手かな
菊簾菊通して起る野ぎく哉
露帯であるじも立りきくの朝
馬牽て菊一本の所望かな
きくおなじから^{よか}自然につくる人
菊あはせ花ものいはど歎すべし
鱧たゝく音は隣かきくの花
我ものと成て十日のきく淋し
起くて菊に十日の朝寐哉
老みせじくくと菊にこてふ哉

十三夜

名月の其夜は丸しけふの月
鬼の子百目になりぬ後の月

畫譜

夕霧に立盡したるかゝし哉
大かたの月を見果る案山子哉
霞ませて尾上に見たきかゝし哉

清水うかむせ四郎右衛門かた
に、はせを翁の一軸有。

松風の軒をめぐつて秋くれぬ
とこれ翁、はなやがうらにて
遷化ありし前、九月廿六日し
たゝめのこされし物なり。こ
れが祭を後々まで執行むと、
二柳庵のぬし、あらたに松風
會といふ事をはじめらるゝに

いく千々の秋吹わたれ松風會
たかのゝ御山にて

あさ霧や御廟にまいる兒の聲
うらがれて不二三尺のたかみかな

中山由男舞臺納

夜啼もこの人の事千々のあき

雪中庵夢太望摩居士、九月六、
日身まかり玉へるに悼の句、
呼かはす聲や霞のうらおもと
と、はるの文のめてたかりし

も、ことしの秋のたよりはか
なくて

そなたぞとふり向は唯秋の雲

暮秋

くれく／＼て秋の行方や雨の音
響をいかにさびしき秋もなごり也
あきの月九月も廿九日かな

初しぐれ露のうたがひ解にけり
うらぎくのそよぐ斗や初しぐれ
神のたびかしま殿よりしぐれけり
月はまだ有かなきかにはつしぐれ
初しぐれいはゞ關寺小町かな

おはりの巨舟ぬしを送て

たびがさによし降とても初しぐれ
一淡々老人の曰。むかし水無潮の上皇の
仰に、春夏のすがたはふとく大きに、

あきふゆのうたはほそくからびてよむ
べしと勅ありし。我俳かいてもこれにな
らひ奉りて、四季のほ句もその心をも
て詠せむこそ、木情にかなひ侍らむか
し。又堅の題はおもしろく、横の題は
うつくしく作せむも俳かいならめと。

半時庵淡々二十五廻忌

しはく／＼と浪にいろ日やむめ

の花と書おくられたんざ

くを取いて

香は今も其ふたむかし冬のむめ

一古物がたりに細川三齋より 太閤様へ
献上の兜、立ものは八日月成し。又千の
利休よりさしあげし石燈籠、火袋のす
かし八日月なり。物其わかち有ながら
風流の心あへりしと、人々かんじ申け
るとか。

爐びらきや泥鰯のひかりも八日月
としよりに來年を問ふ小はるかな
初しもやひと足すべるわたし守

夜半亭児童、はじめは春夜樓
といへり。去とし東神へ下り、
初代の夜半翁が生まれし石町
のかねのほとりにて、雪中庵
など俳諧有て、二代目兼村の
あとをしりて、夜半亭となつ

のうちにして、西の十月廿二
日、伊丹なる土川子の別荘に
て、はからずも身まかり申さ
れし事をいたみて

二度の名もうしや小はるの夜半の聲

冬日

日あたりや寒菊も子を偽すほど
たま／＼に鳥なく冬のひなたかな

豊後の人の國にかへるをおく
る人にかはりて

しぐれずに笠縫の鳥に見るまでは

花屋がうらの事

一ばせを翁なにはのゆめと、むなしかり
したびやのあとは、御堂前花やのうら
と斗にて、さだかに其處をもたげぬ申

人なし。我もひさしく此事に志有ながら、能よすがもなくてうち過ぬ。今年いかなる幸にや。おはりの千世倉蝶羅翁のふるきあとを、たづねばやとのおもむきにて、羅川十叟雄山の二三子、こゝろをあはせ、かるからぬ御しるべをもてかたらひよりしは、南の御堂前南久太郎町花や仁左衛門といへる人にて、元祿のむかしのまゝに家つゞきて侍るが、これがもちつたへし地は、はなやのうらといふめり。又、寸馬呼見の兩子もかの仁左衛門とは故有てちなみ侍れど、此家こそかの舊地といふ事をも聞侍らざりしに、ふと物の次手に此事申出せしも同じ頃にて、おのゝ手をうちて悦にたへず。さらばかの亭をとかりものし、羅川十叟、これが主まうけをなし、石漱雲亭、其常の事にあづかり、都て連衆十八人うちこそ

り懷舊の一會を催ふし、はるかに翁のたましみをまつり奉りぬ。又樵風といへるは之道の孫にして、蕉門の志を起し、花やのあるじも生木とて、これも我徒のみちにいらんとのあらましにて、かれこれうちかたらひ、そのかみ翁かれの吟、かつ丈草のくすりの下と誦し申されしものち、たへてひさしき舊地にてかく文藝を立、之道の孫弟、はなやのあるじの一句を手向申さるゝは、祖翁の靈神さぞ嬉しとやおぼしめすらめ。風雅のみちたえず、因と縁との薄からざる事よと、涙もおつるばかりになむ。今そのおもむきをかきしるして、翁をしとふ人に、其古き跡の正しくのこれる事をしらしめ侍るもの也。かれ野見しかりねのゆめや八十年くすりの下をおもふ埋火 羅川

みな花屋仁左衛門に納む。かつはせをの翁、元祿七年九月、ならより大坂へうつり玉ひ、十月十二日物故ののち、あふみのあわづ寺におくりし毎日の事實、おなじく花やかたに藏之。大坂のばせを塚は、天王寺毘沙門坂の下薬師院といへるに有。即門人野破(坡)叟の造立にて、表の文字は堂上がたの御筆、うらの銘文は筑前の醫香月ながしの作る處也。六ヶ所其のちいかなる事にや、野破(坡)門人梅従といへる人、天王寺権寺のうしろに塚を立しのは、此つつかたれまつるものなかりしにや、寺も今は時宗となり遊行寺と呼ぶ。塚も豪所のせと口にありし。明和七年庚寅の十月、寸馬舊國こゝにたづね、位牌なども往、野破(坡)の納しをもとめ出して祭事三四年、そのうち加州の三四坊二柳、この塚を寺の前にうつし、年々會式俳諧あり。

しぐるゝやむかし夜伽のかゆの音
 はせを忌や良長の山もけふこそは
 芭蕉忌やキ角が餅の冬牡丹
 行燈の糊につたふや冬の蠅
 御命講やあさ日を拜^ふ御上人
 おめいこや女中の法花けふばかり
 人投て念佛申十夜かな
 若後家のことしも出来て十夜かな
 ちりめんのおめこ袖の十夜かな
 雪中の叟、夜ばなしに云。句のあたら
 しみといふは、古よりいでゝ別に奇を
 求むるものにあらず。ある娘の子のい
 と寒かりし日に、友どちとの咄しに、
 風も寒ひかしてふところへ入たといひ
 し。去ば寒はうごかぬ處、肌に通るは
 本情也。ふところへ入るといふがあた
 らしみ也と申さる。魚汶の曰。この頃
 も去寺にて古後(御)達よりあひて、

扱々今どきの嫁共は、かへつて姑ども
 をなかせます。左様くわたくしも隨
 分きげんをとるが、當世じやと申あひ
 たり。そしるは本情にして、なかせらる
 るとあやまりがほに申が、あたらしみ
 ならむと、俱に笑ひて茶を過しぬ。山
 幸のいへる。巨燧にいくたりもあたり
 てぬるは、きくの花の咲たやうにと、
 支考がかけるも是也と笑ひて、又一腹
 を過す。
 爐の灰の暦にかゝる冬至かな
 山本羅川七廻
 亡人戀しき折ふしことや、ひ
 とせは冬の日、又のとしは
 はるの日とかぞへくて、こ
 としのけふの手むけには
 はや七部のち猿みのにしくれけり
 京淋しぐれ狩して遊ばふよ
 風吹ば木にもかやにもしくれけり
 落付てうしの物喰しぐれかな

夜半几童身まかりし事を、江
 戸の成美がかたへ申遣とて
 おどろけやおどろくな此世のしくれ
 師走野や鶴追のけて麥を蒔く
 影追ふて破魔矢ほしけり冬日向
 正面に祠堂のぬしや御取こし
 しれる關取のとし老て、杖に
 すがり、本願寺へまいりしを
 みて
 御取こしや三つ輪くみたる角力とり
 御火たきや官司がをとこの鼻の下
 芥にもならで果けりかへり花
 一良能云。世に來山が、門松やめいどの
 みちの一里塚 といふ句をもて禁忌な
 り。いかにあたらしき事をいはむとて、
 風雅の罪人になれりと云人あり。これ
 は來山がすみける家のうら家にすまむ
 せしものゝ、大卅日に身まかりけり。
 來山が隣は家ぬしにて、不斷は庭を通
 せしかど、元日なれば壘こそと申。う

らのをのこはやもめにて、遠き親類な
どのとり賄たれば、はやくとり仕廻た
き人なるをと、來山聞てきのどくがり、
我は世をのがれたる風人なれば、かま
ひなしと許して、元日の夕がた我家よ
り、野おくりを出しやりての詠なるよ
し。夫を罪人といふも又道を重んずる
の謂にて、殊勝には侍れど、物は其時
の様を能く考ていふべし。人の句を聞
むもおなじ。

口切やつる松太夫いまだ來す
くちきりや御次はならのあられ樽
御師どのに灰かづけり麥の畦

羅川十三廻

十三年その霜月のしもはおく
鳴ながら霜ふるひけり明がらす
朝しもやおしなべてかものぬはれ伏

伏見船中

むろにねるむめさへ有に笥のしも

うかくと白きく老ぬしもの朝

岡橋叙夕十三廻

十七年霜置松はそれながら

上毛湖鏡悼

みなかるゝ草とはしれど此別れ

天満如瓶一周

歸厚堂のぬし身まかりける又
のとし、かの舊庵を訪ひて

石露の花も其すみ染にさけよかし

殘菊や小雨のうつるにし日かけ

ほし舍る冬木の梅のたち枝哉

水仙の能く雁かもに煮られずよ

水仙やひとものとのおもはるゝ

大空は煤にかすみり寒のむめ

中山與三郎がやぐら初に

むかしは嵐、今は中山、三代
のやぐらぬし、是儼門の世家
といふべし。

三代ぞ外になにはのふゆのむめ

すみよしや松の外には大根昌

こがらしや白衣の僧の門に入
松苗にこがらし落てしづか也
月もるや榎のはな散土手のうへ

一活、坊舊室、傳馬町の新道にみられし

時、門人たれかれ寄つどひ、俳道の奥

儀をたづねけるに、其答例の高調子な

りければ、門人の曰。今少しひきく仰

られよ。外面に人や聞ゆ半と申せば、

活々笑て、これほどに申ても熟得なき

かたも有に、此みち執心にてたち聞す

る人はすせう(殊勝)也。呼込てもきか

せ慶事と申されし。活々を悼

活々の字もたのみなしかれ尾ばな

はつ雪や家の工に酒汲む

やゝ有て雪より暮るゝ野山かな

雪一丈かゝる日にのめおにころし

鯛あけの聲横たふや雪のうへ

駿河の乙兒國にかへり申さる
るに、我もかみつけにたびだ

つとて、雪中庵にして手をおかつ。

いざ雪のはなし契らむ不二浅間
蝶有てこのふる雪に舞はゞいかに

家のわきに行來する事四十餘年、半はくるしみ、半はたのしみ。

しむ。

月の富士雪の不二とてはたびいくつ

乙雪や未進ねがひの小百性

雪に窺ゐん居の轉ぶ所まで

鴨資の雪かきわけて尾こし哉

筈もるやたる氷をたゞく磯の浪

一麻(淺カ)生の云。人に句を見せ相談に

及ぶとも、しれた事にても書て見すべ

し。ことばにては聞あやまり、いひ誤

にて、所のたがひめ五音の不通にて、

句の姿情わかりがたく、あたは句を夫

ほどに受とらぬ故、捨る事まゝあり。

智者福者申入たりふぐと汁

一むかしの判者はいかにも覺悟おとなし

く侍り。つゞきの原に、

ちる梅を梢に返す羽蟻かな

宗祇のほ句、ちる花を梢にかへすあら

し哉 此姿情のわかり無覺東に、なに

ともかゝず。左もあしきにあらず。他

につがひ侍らば下にたつ事かたかるべ

し。と蒸堂判也。

金屏にことしの雪のひづみ哉

さくくくと薬喰ふ馬や夜の雪

三世雪中庵夢太居士

さみだれやある夜ひそかに松

の雪

右のほ句にめてゝや、明朝の

雲南裡(程)御南といへる唐人

よりからうたおくりしと聞て

英名たかくからくにまへ、

もてはやしぬる事このみちの

扱換、分て雪門のはまれなる

べし。

雪のあとかゝげて松の月夜かな
雪の日や火桶に覗うちわたし

雪中侍人といふ

うさぎ煮て櫛の音きく夜哉

鷹の殿高が娘を護。かな

ひる過や氷のうへのはしり水

念四坊半僧半俗といへる人の、

よしの山に分入、とくくのみづのほとりにて、一つの石

をひろい得たり。其かたち西

行に似たるも、風流の志こり

し處かとして

氷うつて得たりしや此玉かしわ

一本のかしわにさはるみぞれかな

ひとりねや御油赤坂のかし蒲團

夜話

幸齋がはなし何く紙ぶすま

つもる事しらで蔽のはしる哉

獵人の火蓋をはしるあられ哉

炭はねて庫裡に狸のはしる也

終年帝城裡不識五侯門 といへる事を

ほだたくや殿様しらす年しらす

寒月や經よみしうる法花坊

一山川舊跡したしくたづね入べからず。

まして私に名をつける事なかれ。主あるもの一針一草たりとも取べからず。

山川江澤にもおのゝぬしあり。つとめよや。四季いひ習たる季の詞の外、

めづらしく季に用べからず。世の人三歩が二も合點のうへならでは、季に遣ふ事なかれ。とは、はせをの翁行脚文のおもむきなり。

たゞし、四季のことばにうち添て遣ふは、又おもしろからむか。

上總戸の釘あらは也冬のつき冬ごもりこゝろに須磨の月見かな

かれしやら桂もみえず冬の月

有 惑

けふに成て叶はぬ戀や冬の月

冬の月夜どに照とおもひける

ふゆの月様の梢をはなれたり

冬の月人にくもらぬひかりかな

寒梅や霜はづれて五三輪

むめさくや冬の月夜の朝ぼらけ

尼といふ題にて

清盛の文張てある火桶かな

したくと雨ふる宵のさむさかな

藍に似て寒し野づらのたまり水

あら寒しとと淺間見あげたり

吹立る鴻のうは毛の寒かな

あづかりし人の小判の寒かな

つとめては日を焚人の寒かな

あら釜の鉄氣たき出す寒かな

佛につかうまつるべきとし頃

なればとことし神無月の末、

我淨土門の聲き歌を受侍りし

かど、いまだ世のわざのながれがたきまゝに

十念につゞく霜月師走かな

尾上菊五郎が京へのぼるを祝して

わざをぎのいさをしにならし

て、なにはのきためてたく、

都へかへりのぼる事を見はやして

東風吹むたよりまつ也梅の冬

莖つけや女にわたるちからすぢ

楼高し寒夜に聲をさらす人

寒聲の若は念佛申けり

ある書を誦て

生葱や小仙の世を爪はじき

丸盆につやと白しあらひ葱

最上川この月ばかり大根ぶね

大根引て松風の音ばかりなり

あくる戸の人より先に落ばかり

聞なれて糊たく宿のおちばかな

これは道因法師の姿を畫にかけるなり

むさし野を二日吹るゝおちばかな

まつ戀の題に

こぬ人やとにあかつきの鐘さゆる

しのぶこそ風情あれといひし

に

をし鳥にしろすや戀のおもしろみ
かもなくや衣くの戸のうしろがみ
鴨の毛や吹亂されて水に入
ほしみえてかまきぎはらむ夜頃かな
千鳥鳴きついでて老の念佛かな

三州國府柳雨子所持、あはち
しまといへる貝盃に

疾ほして見よや繪島の浦千どり
聲さびてねぶとにさはるちどり哉
雨止てうしみつ過るちどりかな
寒さうに人はいふ也あじろ守
なまこもし柳の露のかたまるか

一手にはとくなはざれば、天地の神にか
なはず。我人ともに受ざる處有べし。
かひいせの團友、さぬきの浦にて、な
まこともならで果けり平家蟹との初
案認ながら、いまだに心行ぬ事のおれ
ばこそ、其夜のゆめにあまたのかに、

せめらるゝと見しかば、再案、「なまこ

ともならでさすがに平家也 是かけ清
のうたひにも叶たる手には自然と備
り、句ぶりもかく別也と、我心中に服
(服力)せしかば、心神ともにおさまり、
其夜はいさゝかのゆめにも見ざりしと
か。又キ角が、「此木戸や鏡のさゝれて

冬の月 平家ものがたりのうちに、此
木戸は鏡のさゝれてゆぞこなたへ。下略
酔をさせば闊浮にかへるなまこ哉
網子むれてよみ潰されし海鼠哉
ある僧の女の手からなまこかな

かつらぎの大君の畫に

安女より先へまいりしなまこ哉

つれづれを誦て

しやせましかくやあらまほしふぐと汗
叱られし鰻も喰たし母戀し
洗ふ事ふくは外様にまかせたり
鰻の尻をうつゝや謀の亂れ客

たれやらが脛より白し洗ひ鰻

兼房にさたばしするなふぐと汁
分別の字に抛むふぐの腸

去ぬるとしの冬、三島の驛に

とまりし折、はせを翁のすみ

つかぬとありし詞もおもひか

へして

置ごたつこゝよと不二の見ゆるまで

我は七十、婦は六十。

かげぼしやこたつに向ふつゝ井筒

老情

脱まいと一町廻る頭巾かな

くろかみと見ようば玉の投頭巾

あかどりや君にひかれて雲のうへ

加茂の明神勸請の祠奉納

水潜る色も丹塗のもみぢかな

晩年

猫板にかくてぞとしのかくれ里

まちかねて寐屋にほむらの湯婆哉
むつごと古きたんぼのもれやせむ

石町のかねに枕をそばだて、

冬ごもりわづかに石路の花をみる
拜領の鼠馴付ぬふゆごもり
冬ごもり蠅の古巢をながめけり
七日みる若菜の巻やふゆごもり

過ぎりし人の事を思ひ出で、

曆かへばその月と日は有ながら

都のさまも暮うちはて、け

ちますばかり大路のゆきゝの

きはくしくも

ちやつせんや宗左が門下もろり過る

ひととせを風にとられつ曆うり

鏡屋のかどに立けりこよみうり

うしとらと恐ろしき野をはちたゝき

鹿ひさぐ家ともしらすはちたゝき

山里はさびし都もはちたゝき

何踏だ念佛なるらん鉢たゝき

いとさむしと見ゆる夜の

辻君に衣かられなはちたゝき

北は黄に石路咲ぬらしいぶき山

一支考の曰。風雅のかたはしをこゝろへ

たるもの、たま〜名家の一卷を見て、

此句はをかしからずその句は味うすし

などいふあれど、一卷につらぬる事、

あながちに一句のうへを論せず。ひと

度は雨となし、ひと度は雲となし、中

品の眼をとどむべき事を恐るとなり。

法然上人の語を聞て

寒念佛目のさめたらむほどは聞け

師走の雨世にある人のほめ申

寒椿咲てちりけり伊豆が崎

大藪や竹の子はらむ寒のあめ

かほみせや衣に掃るゝはしの霜

かほみせやひいきの馬をまぢかねる

寒の紅粉團十郎へまづ参る

すゝはきや盃のうつる日のひかり

佛名のおはりに僧の笛聞む

かん明や三味線ばこにものゝ音

笛分の豆こぼしけり角力とり

一防人丸山權太左衛門が角力の高名はい

ふも更也。全躰心やさしく風流にして、

雪中二世史登の門に入、俳諧のほ句を

なす。あるとき連中の望にて、我手の

ひらを墨にて紙におし形をなし、其か

たはらへ、

ひとつかみいざまいらせむとしの豆

かれが身の丈六尺三寸七ぶ、手のひら

長さ七寸九分あれば、よき祝の句也。

あら〜しきわざのものながら、かく

風流なりしも、いとやさしかりける。

あひる三度巡りて暮るゝ冬至哉

にて

我戀は松をしぐれの十二日

茶のために月うちならす氷かな

川風さむき夕ぐれ

とらへよと君にすれあふ頭巾哉

めうがやに一夜遊ばむとし忘れ

としのいそぎとて、餅つくあ

らまし、井のもとにたちまふ
下女どもの我はがほなるも、
晏子が御者の風情なるにとを
かし。

かたはらに尻なき妹や米洗ひ
橋の木に引さきし紙子哉
舟床し鴨が鳴てもすみだ川

驛路寒

雲助が衣紋つけたる蒲團哉
大佛の窓よりたかししぐれ不二
たからぶねうるや宵闇のひとあらし
あはれいかに寶舟うる人のさま
紅うらの衣もらひけり着たりけり

霜展明朝又一年

花ちつてのち月雪をとし忘
とし忘れつの國のなに思ふらん
面うちも見よや師走の人のかほ
たれかをしむ師走の月も十六夜
こがねなる世は面白し年ひと夜
世のいそがしきを忘れむと、

なにはの大寺にまうでけるに、
としのをはりのたまふつりな
どいへる、ふる事のおもひい
でられ、むすぶちぎりのすい
はかはらじとよみし、しらす石
玉出の水にむかへば

親にあふとしのかめ井の水かどみ
行としや白髪をかくすおやもなし
としの市子にまじりたる鮮かな
年の市たつうら町は月夜かな
としの眉いざ傾城につまゝれむ
寢覺せぬはるの夜ちかくなりけり

翌しらて三日先みつ とは松
江の叟の不二の雪みたりし、
風流の親相もおもしろけれど、
我は廉破(波)馬撥が老壯にな
らひて、猶いくとせの東行を
願ふ。

髪髭も不二と常盤に六十五
とし忘貝ひるはむと、なには
のうらづたひして、すみよし
の社にまうでけるに、生茂る

松どものみどりなる枝うちか
はずときは木、きねがつとみ
のうらかぜにひびきて、世の
外の心地ぞせらる。まとも無
事をもて奇特とすといへる御
神陀(陀)も、ひとしほありが
たくて

としのくれ住吉はよき宮所
年ひと夜あらおもしろの飛鳥川

攝州ふく原、沙月九十才にて、
十二月廿五日身まかり申され
しに申遣す。

人壽百歳のくに、うまれて九
旬を一期とし、はるちかく見
やりてもとの國にかへり申さ
るゝ翁をうらみて

たる事をするや命のとし仕舞

異方の災にあへりし去年のく
れにひきかえて、あらたなる
家にはるをまつて

めでたさや大卅日の夕がらす

立春在(臘)

はるや來しけさは五つの花の雪
餅つきやこしきがうへの山かつら

既 春

初とりやめかりの息のゆるみより

四季のほ句千あまり、すみつ
きの事ぐさ百三十かさねのも
の、みづから筆とりかき納て

ふたおやにみせたし今年六十九

寛政二庚戌年十月

それ大和歌は天地ひらけ初しより、地の花の天にはじまり、天の月の地にすめる、天地和合の大道たどちに詞となりて神を貴み君をあがめ、世を治め身をおさむる道とはなりけらし。(春は)先梅かさすより、桃の雫の盃にしたより、菖蒲葺軒には、のぼり甲ななどを立ならべて、よこしまの氣をしりぞけ、菊の白露は淵となるらむいく世のすへまでをいひとぶき、一陽來りかえる頃には、おさなき人の髪を置初、袴着そめなどして、神に詣せんとて出たちたるを、老たるひとの杖に腰(懸)かけて、見送りむたる心のうちこそたのもしけれ。四海浪しづかにして、橋わたさぬ道もなければ、往來に足をだにぬらさず。かくおほん恵みふかく治る國のためしには、民くさうるほひて、俳諧のつらねうた(をつらね)なを万歳をうたひて、人皆鶴龜の齡をしとふ。かゝる御代こそあふぐべけれ。

お に つ ら

(此文は鬼貫の「ひとり言」祝」と題せるものを、
跋の如く附載せるなり。)

附言



安井舊國名政胤華名宗二孫、回心齋、又稱大江隣、其先出村岡之清流、在武門而姓、於小島、岡初卜居、民間從事、銀山之役、政容胤道頓之系、改姓安井、揖北海諸州之產、大啓交易場、又享保中政勝、創東都脚力之職、以令末輩、參商讓業、於舊國、職道益盛、居士舊國、其性清雅、九歲班職中、交替兩都者、都七十回、黽勉不弛者、殆六十年、以是久任職掌、流範于當世、大起家聲、垂訓于后昆、加旃于歌道、于俳諧、于鎖術、于筆鋒、各倚名家、探其秘蹟、專名俳派、不心酒、其伎而、常言夫、俳自然、聲感、事述、女志、耳不心、潤飾、譬如花、本天生者、自然

安井舊國名は政胤、華名宗二、回心齋と號し、又大江隣と稱す。其先は村岡の清流に出づ。武門に在りて小島を姓とす。國初め民間に卜居して、銀山の役に従事し、政容道頓の系を胤ぎ、姓を安井と改む。北海諸州の産を揖して、大に交易場を啓き、又享保中政勝、東都脚力の職を創めて、以て末輩をして參商せしめ、業を舊國に讓て、職道益々盛なり。居士舊國、其の性清雅、九歲にして職中に班し、兩都に交替する者、都て七十回、黽勉弛まざる者、殆んど六十年。是を以て久しく職掌に任じて、範を當世に流れ、大に家勢を起して、訓を后昆に垂る。しかのみならず、歌道に、俳諧に、鎖術に、筆鋒に、各々名家に倚つて、其秘蹟を探り、専ら俳流に名あれども、必ずしも其伎に洒れず、而して常に言ふ、夫れ俳は自然の聲、事に感じて其志を述ぶる耳、必ず

可愛剪裁者容態可惡俳之所貴在語近
 於身意徹於神也可觀其志操卓異然如
 是一時居士遊于松嶼臨扶桑三絶之妙
 境沈吟苦思未得一句愛寐有感著懺悔
 一章以演文所自得又嘗西上之辰采途
 於北陸凡涉經歷山川之美驛程之勝悉
 圖畫之以貺未見未聞衆庶文它所鈔錄
 不勝枚舉也予素有師檀契識居士者熟
 今見俳諧懺悔一帙幸書居士生平萬乙
 聊供夫懺悔之一端者而已省寬政庚戌
 中冬朔

阪陽城南圓通蒙光誌



しも潤飾せず譬は、花木の如し。天生
 の者は自然にして愛す可し、剪裁する
 者は容態惡む可し。俳の貴ぶ所は語耳
 に近うして意神に徹するに在りと觀
 つべし。其志の卓異なる概して是の如
 し。一時居士松嶼に遊んで、扶桑三絶の
 妙境に臨み、沈吟苦思して未だ一句を
 得ず。夢寐感ありて懺悔の一章を著は
 して、以て其自得する所を演ぶ。又嘗て
 西上の辰途を北陸に采り、凡そ經歷す
 る所、山川の美、驛程の勝、悉く之を圖画
 して、以て未見未聞の衆庶に貺ものす。
 其他の鈔録する所、枚舉に勝へず。予素
 より師檀の契有りて、居士を識る者熟
 めり。今俳諧懺悔の一帙を見て、幸に居
 士生平の萬乙を書し、聊か夫の懺悔の
 一端に供ふる而已。時に寬政庚戌中冬
 朔。

阪陽城南圓通蒙光誌す

寛政三庚戌年十一月

大江隣藏板



江戸
大坂
京都

西村源六
藤屋彌兵衛
橋屋治兵衛
板